

障がいのある人の創作活動の指標に関する研究

村谷, つかさ

<https://doi.org/10.15017/1931925>

出版情報 : 九州大学, 2017, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 村谷つかさ

論 文 名 : 障がいのある人の創作活動の指標に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、近年日本において障がいのある人の創作活動について社会的な認知や関心が高まる中、福祉や芸術の領域を超え、その存在意義を社会との関係の中で捉えていくための仕組みづくりを行う。そのため、異なる専門領域や立場の人が実践や議論をする際、論点を共有できる指標の作成を目的とした。そして、その指標と現状の課題解決や、社会変容を生み出す相互作用的展開との関係について考察した。

福祉ないし芸術の領域には共通して、活動に関わる主体の認知転換と行動変容による個人変容から、社会の変容への相互作用的展開を起こすことに対する視点が存在する。この視点を参照し障がいのある人の創作活動について捉えると、作品としての「アート」というよりも、活動の過程(プロセス)において、障がいのある人と支援者の関係性により生じていることを「アート」と捉える「プロセスとしてのアート」という概念が支持できる。しかしその概念と、公の議論において重視されていることの誤差が、実践を積み重ねた障がい者支援施設が示す意義や目的との誤差にもなっている。また、特定の呼称を用いて活動を推進している団体(個人)間で論点がかみ合わないまま議論されることも課題といえる。このような現状における課題を「言葉の概念・情報の整理に関する課題」「専門領域や立場の違いに関する課題」「価値判断の基準に関する課題」という3つの視点で整理した。そして、課題解決の研究アプローチとして、研究対象とする範囲を障がい者支援施設で行われている、知的障がいのある人の絵画・造形を中心とした活動に絞り、使用する用語に関する「変数の定義」と、異なる専門領域や立場の人が論点を共有できる「指標」の必要性を示した。

異なる専門領域や立場の人が共有できる論点を抽出するにあたり、日本における障がいのある人の創作活動を思想的にも実践的にも牽引し、各領域の壁を打ち破る原動力となっている人物5名に着目した。彼らが著した書籍を対象とした文献調査を行い、「障がいのある人についての項目表」「支援者が持つ意識についての項目表」という2つの項目表を案出した。次に、2つの項目表の検証のため文献の著者5名に対し直接調査を行い、概ね妥当性に関して賛同を得られた。また、項目表を基に調査を行うことで、創作過程に関し総合的に論点を捉えたうえで、各著者の考え方や意識を量的・質的両方の分析をあわせ考察することが可能となった。加えて、回答者の基本情報や、障がいのある人の創作活動について持つ意識調査を実施することで、各著者の考え方についてより深く考察することにつながった。さらに、日々創作支援の現場に向き合う支援員や創作活動に関わるアート関係者、計19名に対し項目表の検証を行い、概ね妥当性に関して賛同を得られた。また、支援員の専門領域や立場の違いによる、現場に関わる意識の相違などを示した。そして、将来的に被験者数や範囲を広げた調査を行ったときに可能となる分析や活用の可能性について示した。

項目表の案出と検証を通し得られた結果について総合的な考察を行った。著者に対する調査により得られた各項目に対する回答を分析することで、各著者には判断の基としている「考え方の規範」があることがわかった。そして、「考え方の規範の構成要素」として、「既存の概念や価値観の打破」や「相互変容」などを捉え、それらが「障がいのある人を中心とした視点」に貫かれていることを考察した。この視点から障がいのある人の創作活動の環境を考えなおすことで、支援者が前提とし

ている常識に揺らぎを与え、社会変容にもつながりうるきっかけが得られると考えた。「考え方の規範の構成要素」は、「指標(考え方の規範)」として活動の形骸化を防ぎ、実践する団体(個人)が自分たちの立ち位置を自覚し、ポリシーを定めるための指針となると考察した。そして、「項目表」とは自分たちのポリシーを基に実践する際、創作過程において価値判断が行われる論点を総体的に把握したうえで、具体的なあり方を考えるための指針になると考察した。よって、「項目表」は「指標(項目表)」として、支援者が行う実践内容を整理し言語化することで無自覚な支援のあり方を防ぎ、各団体(個人)の「考え方の規範」に沿った支援を具体的な行動に結びつけていくものになると考えた。

本研究の結果、福祉や美術の領域を超え、社会との関係の中で捉えられるような仕組みとして「指標(項目表)」と「指標(考え方の規範)」を作成した。この2つの「指標」は叩き台として実践や議論を継続的に促すものとして活用する。それにより、活動を一つの「解」に向かわせるのではなく、関係者個々の「考え方の規範」を自覚させ、それぞれの領域や目的に沿って固有で多様な試みを促進させることを期待する。